

「8匹のエビフライ」

奈良県 吉川光則

僕の家では、家族がみんな揃ってから晩ご飯を食べることが習慣になっています。そして、みんなで揃ってご飯を食べていると、いつもある問題が起きます。それは、父の嫌いなものが多いということです。そして、その父が嫌いなものとして残すものは、僕のお皿の上に盛られます。しかし、父の残すものは、大概僕の好きなものだったので、僕は喜んで、父の残したエビフライやスパゲッティを食べました。そして、お腹が満腹になった後、リビングに向かって、テレビを見るというのが、僕の日常になっていました。僕は、小学校に通っている間は、あまり食べない普通の小学生でした。しかし、中学校に入ってから、体格もたくましくなり、ご飯もたくさん食べるようになりました。

そして、ある日、小学校の卒業アルバムを見て、自分でも大きくなったなあと、実感しているときに、ふとその日の家族での夕食風景を思い出しました。やはり、その日も父は、嫌いなものといって、エビフライを残していました。そして、それを僕の皿に載せるのでした。僕は、母に、「お父さん、よく食べ物を残すね。具合でも悪いのかな」と聞くと、母は「そうね。あなたが中学校に入ったあたりから具合でも悪いのかしらね。まだいっぱい、ご飯ならあるのにね」と、笑いながら答えてくれました。そういえば、父の好き嫌いが激しくなったのは、僕が中学校に入ったあたりでした。そのとき、あることに気付き、今まで気付かなかった自分は、なんて無神経なんだろうと思いました。父のさりげない優しさをとてうれしく感じました。

そして、その日の次の週に、またエビフライが晩ご飯のおかずとして出てきました。父が、いつものように、それを僕の皿に載せます。僕は、大好きなエビフライを素直に受けとります。その日も、僕の皿の上には、みんなより多い8匹のエビフライが載っています。